

和歌山県小川八幡神社大般若経の調査

著者	西本 昌弘
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	78
ページ	2-3
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023783

和歌山県小川八幡神社大般若経の調査

西本昌弘

2018年7月26日（木）の午前8時前に小川八幡神社に到着し、毎年恒例の大般若経虫干し行事に参列した。東京大学史料編纂所の一般共同研究「和歌山県海草郡紀美野町小川八幡神社所蔵大般若経の研究」に竹中康彦氏（和歌山県立博物館）とともに所外共同研究員を委嘱され、所内研究員の山口英男・田島公両氏らと連れ立って現地に赴いたのである。



写真1 小川八幡神社

同神社では毎年7月26日、地区の人々が集まり、大般若経600帖の虫干し行事を行ってきた。当日は午前8時に神庫から大般若経の入った大箱を出し、神社の参集場まで運び下ろすことから始まる。その後、宮司・禰宜による修祓・降神・献饌・祝詞奏上など大般若経祭典と名づけられた儀式ののち、大箱の封を解き、大般若経を取り出して虫干しする。

折本になった大般若経600帖は12の大箱に各50帖ずつ収納されている。1つの大箱中に元禄製作の中箱があり、中箱中には応永製作の内箱が5段重ねで収められ、1つの内箱に各10帖が収納されている。虫干しは大箱・中箱中から内箱を出し、内箱からさらに1帖ずつ取り出し、折本を開きながら、空気を入れつつ、破損状態などを確認して行われる。そして最後に、「大般若経管理委員会」という方形朱印を捺した封紙を大箱に張ったのち、元の通り神庫に収め戻すのである。

小川八幡神社の大般若経は、1978年に関西大



写真2 大般若経祭典 祝詞奏上



写真3 大般若経虫干し

学文学部の蘭田香融氏の調査によって、その価値が広く知られるようになったもので、全600帖のうち120帖が奈良時代に遡る。そのうちの6帖には天平13年（741）～14年に紀伊国那賀郡の御毛寺（御気院とも記す）の知識が書写したことを示す奥書が書かれていた。この御毛寺は、『日本霊異記』に登場する「弥氣の山室堂」に相当する。すなわち、同書下巻第17縁によると、紀伊国那賀郡弥氣里に村人たちが造った弥氣の山室堂（弥氣堂とも。法名は慈氏禅定堂）があった。弥勒菩薩の脇士の塑像は未完成で、臂手は折れて鐘楼に放置されていたが、宝亀2年（771）7月中旬の夜半、鐘楼から「痛きかな、痛きかな」とうなる声が聞こえてきたので、山室堂に常住する元興寺沙門の豊慶と同里の私度僧信行が知識を率いて塑像を完成させた。この御毛寺（弥氣の山室堂）は現在の和歌山市上三毛に所在する観音堂がこれに比定されている。

関西大学では藺田香融氏を中心に1983年～84年に原本調査を行い、1999年と2000年には補充調査を行ったが、私は藺田氏のお供をして後者の補充調査に参加し、2000年7月26日（水）に吉野集会所で行われた大般若経の虫干し行事に参列した。当時は僧侶二人が大般若経各巻を手にとり、「大般若波羅蜜多経卷第〇〇 三蔵法師玄奘奉詔訳」と首部だけを読み上げたのち、折本の経巻を勢いよく蛇腹状に開く、いわゆる転読の所作を行っていた。当地の大般若経虫干し行事では、かつてはこうした仏教行事としての転読が行われていたが、その後、事情によって転読の継承が困難となり、神社の方で現在のような祭典をとり行うことになったのである。



写真4 大般若経転読（2000年7月）

今回の調査では、虫干しの間に原本の一部を拝借し、奈良時代書写の経巻のうち、奥書に抹消部分があるものを中心に、目視で判読するとともに、赤外線カメラなどで撮影した。また、卷子本であった時代の各紙の寸法を計測することも行った。たとえば、巻第437の奥書は、次のように判読されている。

天平十三年歳次辛巳四月上旬、紀伊国奈我郡三氣■■知識奉写大般若経一部六百卷
河内国和泉郡式部省位子坂本朝臣栗柄、仰願為四恩

「三氣」から「奉写」までの八字分は墨抹されているため、判読が困難であるが、わずかに残る墨痕などから、「三氣」、「知識奉写」の六字分が解読されている。残された二字分を解読するため、墨抹部分を障子越しに差し込む自然光にかざすなどして、何度か判読を試みたところ、問題の部分は、

三毛里之知識奉写

と読めるのではないかと考えた。紀伊国那賀郡

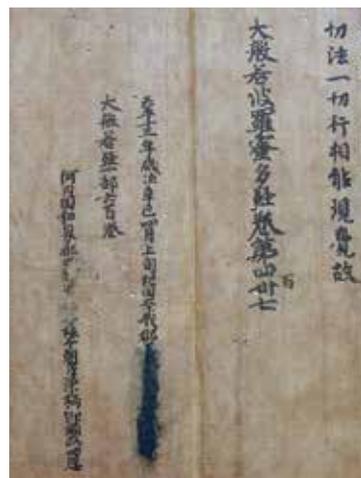


写真5 大般若経巻第437 奥書

に御氣里があったことは、『日本霊異記』下巻第17縁にも記されているので、三毛里の知識が大般若経を書写したとあるのは不自然ではない。ただし、この釈読はあくまでも私案であり、赤外線カメラで撮影したデータと照合する必要がある。

さて、虫干し行事が終了すると、参加した地区の人々には大般若経札が授与される。「奉転読大般若経六百卷守護」¹と印刷された長さ32cm、幅5cmほどの紙の経札で、これを各家の入口に貼り付け、1年間の家内安全・無病息災を祈念する。かつては笹竹に挿んで田の畔に立て、息災・豊作を願ったが、農家の減少にともない、この風習はすたれてきているという話であった。

18年ぶりに小川八幡神社の大般若経虫干し行事に参加して、行事内容の変わった部分と変わらない部分があることを興味深く思うとともに、年に一度だけとはいえ、真夏の暑い盛りに早朝から神社や地区の人々が集まり、大般若経虫干し行事を長年にわたって守り伝えていることに頭の下がる思いがした。

【参考文献】

藺田香融「和歌山県小川旧庄五区共同保管大般若経について」（『古代史の研究』創刊号、1978年）。
藺田香融「小川八幡神社所蔵大般若経について」（『南紀寺社史料』関西大学出版部、2008年）。
竹中康彦「紀美野町に残る大般若経」（和歌山県立博物館編『特別展：中世の村をあるく：紀美野町の歴史と文化』、2011年）。

文学部教授

に御氣里があったことは、『日本霊異記』下巻第17縁にも記されているので、三毛里の知識が大般若経を書写したとあるのは不自然ではない。ただし、この釈読はあくまでも私案であり、赤外線カメラで撮影したデータと照合する必要がある。



写真6 大般若経札